

母性看護学

■構築の考え方

母性看護学では、妊産褥婦および新生児への看護に加え、さらには次世代の健全な母性の育成を目指し、女性の一生を通じた健康の保持・増進、疾病予防を目的とした看護活動を学習する。母性看護の対象は、妊産褥婦とその子ども、将来子どもを産み育てる女性、および過去においてその役目をはたした女性のみならず、生涯を通じての性と生殖の健康を守るという観点から、女性と生殖やパートナーとしての男性、子どもを育てる家族、その家族を取り巻く地域社会まで拡大している。すべてのライフステージを対象とすることから、健康レベルやセルフケア能力が高く、自己決定権を持つ人々が多く含まれる。また、その人々は、身体的、心理・社会的な統合体としての女性および、その女性の子ども（胎児を含む）であり、さらに女性と子どもの健康生活と生殖という観点から、広く対象として捉える。

また、時代の変遷とともに、子どもをより健康な状態で産み育てるための母性への支援が必要となっている。女性の生活スタイルや役割の多様化、医学の進歩・発展、少子・高齢化、母子をめぐる生活環境の著しい変化、国際結婚・外国人家族の増加などによって、母性看護の役割は多様化している。

このような、看護の対象の特殊性や、多様化を踏まえ、「母性看護学概論」では、母性看護を実践する上で生命を尊び、必要な諸理論「愛着理論」「生涯発達理論」「役割理論」「家族の発達理論」、及び、「リプロダクティブヘルス/ライツ」「Sexuality」「母性看護の生命倫理」の考え方を学習する。

母性保健領域では、母子保健を巡る変化を理解した上で、多様化の中で、活用できる制度等を学習し支援に活かせるように組み立てている。同時に、我が国及び世界の母子・家族の健康問題とそれを取り巻く現状を、保健統計資料や調査・研究などから幅広く捉え、看護学の立場から問題解決を提案していく方法も含めて学習する。

「母性看護援助論Ⅰ」では、母性各期と新生児を含めた健康課題や異常状態についての理解を深める。その理解の上で、「妊婦・産婦・褥婦の正常経過とその看護」及び、「新生児の特徴とアセスメントとその看護」についての学習にすすめる。

「母性看護援助論Ⅱ」では、「妊娠・分娩・産褥の異常とその看護」及び、「ハイリスク新生児の理解とアセスメントとその看護」に対する学習内容で構成した。母性看護学では、ヘルスプロモーションの概念を土台に、妊産褥婦をアセスメントするために必要な知識を含めて学習させたいと考えている。これらの知識を前提に「母性看護援助論Ⅲ」では、妊娠・分娩・産褥の状態・状況に応じた母性看護学に特有の看護技術を学ぶ内容とした。